

2017年6月1日(木) 実際の気温 19° /14°



昨日、5月31日00:30フェリーで舞鶴港を発ち、20:45小樽港に着き、その日は小樽に泊まり、朝食を早々に済ませ、08:30に陸別に向かう。

小樽から足寄まで高速道路で向かう。

足寄町の道の駅「あしよろ銀河ホール 21」に寄ったが、松山千春が落と背比べをしているポスターを眺めただけで昼食をとらずに陸別町役場に向かう。豚丼に心ひかれたのだが・・・

それにしても、「足寄高校」の生徒募集のポスターは衝撃だった。

13:30頃、町役場に到着。15:00頃に到着予定だったが早く着いた。

絵になる役場庁舎だ。2階の総務課に向かう。

「陸別町ちょっと暮らし住宅定期賃貸契約書」の締結押印をいくつかして「ちょっと暮らし」の生活が始まった。

「丁度、町長が在席しております」と促され町長室に入る。

野尻町長が水と星が綺麗だ。水はペットボトルに詰めて「陸別百恋水」として販売している。「星が綺麗で、天文台からの眺めは感動しますよ。館長はオーロラについては権威の名古屋大学の方です」

「酒好きの友人に一度星を眺めながら飲んでみろ、忘れられなくなるぞ、と言って誘ったら、酒はどこで飲んでもうまい、と言っていたのが星を眺めながら飲んで一度に虜になりましたよ」

熊は出没しない。蝮はいない。地震がない、だから温泉がない。

「陸別町の良さを楽しんでいってください」、で面会は終わった。

「東一条ちょっと暮らし住宅」へ案内いただき、「特に、ごみの分け方・出し方は戸惑うことがあると思います」ということであつたが、後日本当に夫婦で思案した。設備などの説明を受けたあと町内を案内して下さるということで役場の車に夫婦同乗させていただき廻った。5～6分で廻れる小さな町だ。

雨が降り出した。

荷物を早く運び入れなければ、と思うものの雨脚がさらに強くなった。「北の国から」というテレビドラマで、畑の土が流される豪雨の場面を思い起こした。

しかし、しばらくして雨脚が弱くなったので荷物を運び入れた。
部屋が温まっていた。出かけるときについていなかった灯油ファンヒーターが18度に設定してありそれを下回ったため自動点火して部屋を暖めていたのだった。換気も自動にされる。妙にうれしかった。贅沢な気がした。

今夜の食事のため、午後6時半まで営業しているAコープに歩いて出掛けた。
レジ袋が5円した。金賞「ゆめびりか」米を奮発して買った

ゆっくり風呂に浸かり一日を終えた。

6月2日(金) 実際の気温 20° /9°

朝から雨。

持ってきたミニコンシステムで音楽を流しながら日記を書いている。

妻はごみの分別に奮闘している。

時間が来たのでNHK連続ドラマ小説「ひよっこ」を妻が観だした。多局の番組が見られる。昔からこうだったのだろうか。デジタル放送のお蔭だろうか綺麗に映る。

「晴れたら山菜採りに行きたいね」と妻が言う。

昨夜、Aコープで買ったサンドウィッチの包装セロファンに付いていたマヨネーズなどの汚れを落としてから、「プラスチック」に分別しなければいけないのか、妻はしばらく悩んでいた。

役場に電話をしようか、とも言っていたがしまいに洗って乾かしてから「プラ」に入れることにした。それで、踏ん切りがついたのか、霧雨の中夕飯の買い物を兼ねて図書館に行こうと言った。

公民館は図書館を兼ねていた。

陸別町町民文芸誌「あかえぞ」を手にとってぱらぱらと拾い読みした。



「オーロラタウン・陸別」に立ち寄った。初老の夫婦が二組いた。

「幸せの黄色いハンカチ」の陸別駅前のシーンのスチール写真が飾ってあった。

農協で野菜を買いたいと妻が望んだのだが、雨を含んだ風が強くなり傘を揺らすので、
もAコープに行った。

「フライパンはありませんか？」

「陸別に金物屋がありませんから・・・」

帰り道、下校中の児童から「こんにちは」と挨拶を受けた。

どの家にも花が咲いていた。



高山植物の「コマクサ」が咲いているのに女子大の山岳部だった妻は興奮していた。他の植物が生育できないような厳しい環境に生育することから「高山植物の女王」と呼ばれている、と教えてくれた。また、コマクサは、数ある高山植物の中でも人気 No.1 で花を愛でる登山者にとって憧れの花である、という。花言葉は、「高嶺の花」で「陸別の寒さは本物ね」と妙に声が上がっていた。そして、庭に「こまくさ」は贅沢だという。

6月3日(土) 実際の気温 13° /8°

6時起床。

小ぬか雨。肌寒い。妻が「勿体ない」と就寝前に灯油ファンの電源を切っていた。

コーヒーを淹れて、パンを焼いて、バターを塗ってレタスとハムを載せて朝食。在り来たりだが、美味しい。

10時過ぎ、足寄町に向かう。妻が楽しみにしていたのは「花をめぐる」旅だった。

「鹿の飛び出しに注意」この看板があるところは車の速度を落としてください。

鹿と衝突したところで、もともと鹿の通り道だったのです。そこへ道路を引いたのですから。朝方、夕方は注意してください、と説明を受けていた。

「鹿の目はかわいい」と野尻町長が仰っておられたが、動物の目はかわいいが人の目でいやな感じの目は確かにある。

里見が丘公園の芝桜を見に行くことにした。「公園内にはツツジ1万本、桜1,000本が植えられているが、名物はシバザクラ。」と、日本観光振興協会(※掲載されている情報や写真については最新の情報とは限りません)の説明があった。「第36回足寄ふるさと花まつり」が先週の日曜日に行われていた。

道に迷った。足寄高校の前に出た。落ち着いた佇まいの中に在った。行き止まりだった。引き返して家に入ろうとしている主婦に道を尋ねると「見頃は過ぎたかしら？最近見に行ったことがないので」
案外、いつでも見られる人は見に行かないものだ。見頃は過ぎていた。先週、30度近くの日が続いていたせいかもしれない。

足寄駅を写真に収め、その裏のストアーに寄った。
ついに、フライパンとバターナイフを買った。
鮮魚を売っていたので、礼文と貼られた「ホッケ」を買った。地元で買う値段の三倍していたが、冷凍ものしか知らないので食べてみたかった。

次に、上陸別の三好さんのつつじ園を観に向かった。
だが、上陸別に入ったところで道を間違えた。それで、風が強く、震えながら見るのもどうかな、ということで帰ることにした。

日課になりつつあるAコープ行は止して「ホッケ」を焼いて日本酒を飲んだ。



「肴は炙った烏賊でいい♪」ではないが、町長が好きだと仰った「盃とぐい呑み」はないけれど、一つのガラスコップと一匹のホッケと二膳の箸で心地よく酔った。

今夜は冷え込むからと灯油ファンの電源を切らずに寝床に入った。

6月4日(日) 実際の気温 12° /7°



7時の時報の放送で起床。

窓の外は、濡れはしないがそぼ降る雨。妻は手持無沙汰で念入りに部屋の掃除をしている。

手持無沙汰と言えば、陸別町に来てから朝刊を読んでいない。新聞を読まなくてもテレビがあれば事足りるのだが、何とはなしに気が紛れない。

雨読の日になった。気温7度と報道している。

シーニックバイウェイ北海道という冊子に掲載されている、十勝シーニックバイウェイの「緑のトンネル」を雨のなか走りたいと妻が言い出したので午後であったが出掛けた。

「園内には、16,000株のエゾムラサキツツジと2,000本のエゾヤマザクラがあり、春には一斉に開花する様子は見ものです。」とあったので本別・義経の里に立ち寄った。

だが、見頃は過ぎていた。

池田町に向かった。「晴れたらいいね♪」、本当にそう思った。

「緑のトンネル」が池田町、豊頃町、浦幌町のどこの道だか分らなかった。

足寄駅裏のストアーに寄り靴ベラを探したがなかった。午後8時前に帰り着いた。勿論、Aコープは閉まっている。

6月5日(月) 実際の気温 17° /8°

天気予報通り、薄ら曇りから青空へと移っていった。

「北見フラワーパラダイス」に9時半頃向かった。

フラワーパラダイスは、北見で種苗店を営んでいた大西米吉が私財を投じて造成開始からおよそ6年の歳月をかけて1973年(昭和48年)に開いた花園である、という。

入場無料だった。受付の方が「京都からですか？わざわざ遠いところからよくお越しくださいました。ゆっくりしてってください」とナンバープレートを見て言われた。

ただ、残念なことに桜とつつじは花の時期を過ぎていた。

「置戸 勝山ゆうゆう温泉」に行くにはまだ早いので「薄荷記念館」に寄った。だが、休館だった。兵庫県出身の人が薄荷を栽培した、と知った。薄荷を思いついた経緯を知りたかった。その昔、薄荷の匂いが北見の街を覆ったことだろう。

「道の駅 温根湯(おんねゆ)温泉」に行くことにした。

空はこれまでと違って澄み切った青空であった。

道の駅の窓口で妻が「花が咲いている場所がありますか」と尋ねると、窓口の女性が「花の端境期ですね。五月下旬で春の花が終わり六月中頃から夏の花が咲き始めます」

それでも、折角だから「花公園 根々の丘」に行くことにした。その前に、遅くなったお昼を「手打ちそば すゞき」で摂ることにした。妻が「とろろそば」の食べ方を尋ねた。

地元では、とろろが椀に入っていて好きな量だけ出汁に浮かべてそばを付けて食べるか、最初からとろろがそばに乗せられていてそこに汁をかけるのだが、既にとろろが出汁に溶いてあった。

人の良さそうな店主に「そばを漬けて食べてください」と教えてもらった。普通の出汁は別の椀に入れてあった。

入館者が減少しているという、「北の大地の水族館 山の水族館」に入った。



テレビ・雑誌などで紹介されて入場者が増加した時代は過ぎ、苦戦する時が来ていた。

ただし、「北の大地の水族館には、日本最大の淡水魚であるイトウの中でも最大級の大きさである1メートル級に育ったイトウが40匹も飼育されています。これは、日本で最多の飼育数です」、イトウを見る価値はある。

「花公園 根々の丘」を訪ねる。見事な花の端境期であった。一本の花も咲いていない。

「おけと勝山温泉 ゆうゆ」に着いたのだが車で一杯だった。妻は二度の手術をしているため人前で肌を見せるのをためらう。平日で空いていると思ってきたのだが、五時を過ぎて車が次々とやってきた。

住宅に帰り着いて散歩に出た。ガレージに4・5人集まって、ガレージスナックが開かれていた。声を掛けられるかと思ったが会釈をして通り過ぎた。

町外れの空き家を探した。

風呂から上がりガレージスナックとはいかないが妻とふたりでお酒を飲んだ。散歩したためか寝入りが早かった。

6月6日(火) 実際の気温 15° /7°

目覚めていても、7時の放送が流れるまで床の中において、放送が流れれば起きるのが約束事になっていた。

オンネトーに行くとは昨夜から決めていた。

37年前の新婚旅行に携帯したガイドブックと地図を今回も携えていた。その地図に従えば足寄まで出てそこからオンネトーに向かうことになる。だが、そのガイドブックにない道、国道143号線を進んだ。砂利道になった。カネラン峠の標識に出会った。

「鷺足商店」の看板の建物が目に入り少し行き過ぎて引き返した。



前歯一本のお爺さんの後を黒猫がついて歩いていた。話を伺うと、「昭和七年に建てられ、その頃は立派な建物と言われてのう、一階は車庫、二階は部屋で、運送業(タクシー・トラック)をしておって運転手の宿舎を兼ねておった。軒下一面にあるのはツバメの巣で、スズメが宿にしたためにほとんど壊れてしまうたが、まだ巣がしっかりしていたころは写真を撮る人が多かった。農薬を被った虫を食べた雛が、ある朝軒下一面に落ちていての、親鳥はそれを見て虫を食べなかったのか無事だったわい。でも、それから一羽も軒下に来ん。あれは人間も危なかったのう」

「老いた・大きな沼」オンネトーに向かった。

ここで思わぬ出遭いがあった。ご近所に住むご夫婦に出会った。

京都とはいえ日本海に程近い片田舎のご近所が、何の約束もせず旅程も知らず出くわすとは言葉にできなかった。



「縁ですね」と出会ったご夫婦の奥さんが声を引いて言われた。

広島からのご夫婦が「広島の自宅から舞鶴港まで6時間。フェリーで5月28日に発ち、小樽で車中泊して、今回の北海道旅行は美味しいものを食べる旅にしたくて宿泊代を浮かしています。先程、遊歩道を一周してきたのですが、迷子になりそうでした。途中、倒木で道がふさがれていて整備されておらず人の足跡を辿ってきました」

釧路市立共栄中学校生徒の挨拶を受けながら「湯の滝」に向かう。熊が出たという情報で

札幌から来た人は行かないという。「湯の滝」の入り口で準備しているご夫婦に「観光地だから大丈夫、誰がそんなこと言うのですか」と叱られた。

滝は二つあるのだが奥の滝は立ち入り禁止だった。

釧路市立共栄中学校生徒と出入り口で再び出会った。この日、3年修学旅行・2年宿泊研修・1年社会見学らしい。何年生が来ているのか知らない。

「摩周湖」に向かった。37年前の新婚旅行で訪れた時、一度目は霧に覆われて見えなく、翌日訪れた時は霧が一瞬晴れて見えた。

その前に、37年前のガイドブックに印を入れている「双湖台」に寄る。人気がない。シーズンになると賑わうのだろうか・・・

麓の「道の駅 摩周温泉」に立ち寄る。設置されたテレビ画面に映りだされた摩周湖は晴れて綺麗に見える。第一展望台に赴く。再び夫婦で訪れることができたことは普通の出来事ではない気がする。妻が二度も手術していることを思えば尚更だった。

美幌峠を通過して帰ることにした。もう一度美幌峠に立ちたかった。道の駅「ぐるっとパノラマ美幌峠」に来た。



屈斜路湖。ぐるっとパノラマと名付けるだけあって目の前は広い。「摩周湖」もそうだったが、人間の小ささを知らされる。



午後 7 時半に帰り着く。
空も晴れて気持ち一杯遊んだ。今夜はぐっすり眠られる。

6 月 7 日(水) 実際の気温 18° /6°

7 時の放送で起床。

昨日、オンネトーで出会った広島からのご夫婦の勧めで網走の居酒屋に行くことにした。

金に糸目をつけず贅沢な食にありつく、そうって紹介されたのが網走の居酒屋だった。
昼をそこで食べて夜のサッカー日本代表戦を見ることにした。試合開始の午後 7 時 20 分にはテレビの前に酒と肴を用意しておかなければならない。

出掛ける前に「ひよっこ」を見てから旅支度を整えるのが段取りとなっていた。
だから、9 時過ぎに出発となる。目的は教えられた食事処だが、妻が購入した[道の駅 スタンプラリー2017]冊子にスタンプを押すのがもう一つの目的に何時しかなっていた。

道の駅「メルヘンの丘 めまんべつ」に行く。妻は美味しい野菜が食べたいとアスパラを購入する。それを車に積んで走るという。「保冷剤を入れてもらったから」と安心している。

メルヘンの丘を写真に収める。「没蹤跡」とは足跡を残さない生き方らしい。オンネトーで出会った何組かのご夫婦がそう仰った。流行っているのだろう。

セルフガソリンスタンドは初めてだったが、店の小母さんに給油してもらう。これなら、普通のガソリンスタンドと一緒にだった。その小母さんに「気温が低かったので東藻琴の芝桜公園がまだ見頃ですよ」と教えられた。事前に妻が調べて「今年の芝桜まつりは 6 月 4 日(日)で終了致しました」とのことだったので大変喜んだ。

無駄足だった。最早、入場無料になっていた。

道の駅「はなやか(葉菜野花)小清水」に向かう。



「原生花園」と妻が催促する。37年前に来た時も、これが花園？と思った。他の観光客も首を傾げていた。案の定、端境期か、何も見る花はなかった。ただ、散策路などは整備されていた。「花が少なくなったのは馬を放牧しなくなったから、馬が雑草を食まなくなり花が育たなくなった」と老人が教えてくれた。馬は花を食べないらしい。

午後2時頃に着いて居酒屋で昼食を摂るつもりでいたが、居酒屋の前に道の駅「流水街道網走」に寄って行くことにした。そこで、網走の食事処を見ると、居酒屋は午後5時からだった。居酒屋が昼から空いているわけがない。道の駅で食べなければ、サッカーの試合開始に間に合わない。

中島みゆきが北海道出身だと知っていたので、「ばかだね、ばかだね、ばかだね あたし(化粧)♪」と歌いながら帰ってきた。

6月8日(木) 実際の気温 17° /12°

7時、放送で起床。今日は休息日。妻も私も日記を書く。

一步も外に出ない。そう決めたものの葉書を出しに行こうと思い身支度して外に出たが、いきなり雨粒が。それで、再び閉じこもる。
貧しい朝・昼・夜食となった。ただ、酒と肴はある。

6月9日(金) 実際の気温 21° /13°



何時もの放送がなかった。今か今かと待っていたが、おかしいと思い寢床から出ると8時半だった。雨の予報だったが、次第に晴れてきた。花は端境期だから、「十勝 千年の森」に行くことにした。

快晴。高速道路を使った。三時間を要する、とあった。

昼過ぎに着いた。十勝は酪農の町らしく方々に牛が放たれていた。

職員に順路を尋ねた。今日は青空だから「千年の丘」まで上るといいですよ、その前に食事をされてはいかがですか、と園内の「ガーデンカフェラウラウ」を紹介されてそこでパスタとピッツアを食べた。ファーム・メドウ・ローズ・アースの各ガーデンを巡り、「千年の丘」を登った。日差しが強い。頂上に日陰がなかった。

早く日陰に入りたかった。丘を下ってフォレストガーデンを歩いた。

またファームガーデンに戻ってきた。「花の見頃はいつですか？」と妻が尋ねると、若い職員が作業の手を止めて「七月初旬ですね」と答えて、「観光バスで来られますから混雑しますけど・・・」と付け加えた。

ゆっくりと花を観賞するにはどうすればいいのだろうか？花の命は短い。とすれば、一時に、鑑賞時間も短くなる。

妻の、花ともう一つの目的になった[道の駅 スタンプラリー2017]冊子のスタンプ押しに付き合わされて道の駅を巡って帰途に就いた。

道の駅「おとふけ」でアイスクリームを食べる。

道の駅「ピア21しほろ」は午後6時を過ぎていたためスタンプを押せなかった。

それから、近くに来たからと映画とテレビのロケでよく使用される「十勝牧場 白樺並木」に立ち寄った。

「白樺は若い木がやはり綺麗ですね。これまで車窓から見た細くて白く伸びた肌をした白樺は

綺麗でしたね」

ここの白樺並木は樹齢寿命の40年を超え、50～80年に達しているらしい。それで、痛んだ白樺は伐採・抜根し、そのあとに植栽する。

道の駅「足寄湖」は閉鎖されていたがスタンプは押せた。「もったいないね」と妻が言う通り、チーズ工場と並んで絵になる佇まいだった。



糠平国道から分かれて芽登までの足寄国道は真っ直ぐで気持ち良かった。足寄駅裏のスーパーで買い物をした。買ってきたお惣菜で夕食を済ます。

6月10日(土) 実際の気温 16° /11°

枕元に時計がないから何時だかわからないのだが花火が上がった。運動会を決行するとの合図だ。曇りから雨、の予報だった。

住宅の下が陸別小学校だった歓声が聞こえる。



在校生は100人程度、一学年に15人程だということだった。小学校・中学校の給食費は全額補助される。

今日は雨になると思っていたのでゆっくりしようと思っていたのだが、こんな日こそ温泉だ、ということで日帰り入浴を調べ尽くして「しほろ温泉 プラザ緑風」に行くことにした。

11時頃に出発。

近くの温泉をいろいろ調べたのだが、有名観光地にある日帰り温泉は、土曜日ということもあり1,500円ほどした。それが、「しほろ牛すき焼き定食＋入浴」で1,300円だった。65歳以上

は 350 円の入浴料だった。とろりとした湯だった。

そして、妻の目的になった[道の駅 スタンプラリー2017]である。

道の駅「ピア 21 しほろ」に先ず行く。賑わっていた。ピア 21 しほろ名物の「生産者還元用ポテトチップ」を購入した。そして、やはりソフトクリームを食べなくて何が北海道だ、ということ
でここでは「バニラとごま」のソフトクリーム。ゴマソフトがうまい。

次に、昨日の足寄国道も真っ直ぐだったが、国道 274 号線の 16 キロメートル続く直線道路を
走って、道の駅「うりまく」に行く。

乗馬が体験できる珍しい道の駅だった。冷凍「にくじゃがまん」を買う。

雨が激しくなっていた。雷も鳴る、と妻が天気予報で言っていた、という。

道の駅「しかおい」に行く。

水槽にチョウザメが泳いでいた。聞くとチョウザメの飼育に成功したとのことである

「あのキャビア？」と妻は驚いていた。そのキャビアである。

ワイパーを最速で動かしても前が見難い。ほとんどの車がライトを点けている。すれ違う車
の飛沫が掛かる。「十勝 千年の森」に行ったのは昨日である。これだけ天気が変わるとは驚
く。

ようやく雨が小降りになってきた。道の駅「足寄湖」の写真撮る。

道の駅「あしよろ 銀河ホール 21」で閉店間際にスタンプを押す。

6 時半頃に帰宅。陸別小学校に人も車もパラソルも無かった。静かな校庭だった。

6 月 11 日(日) 実際の気温 18° / 8°

7 時、放送で起床。

冷たい雨。灯油ファンが点火する。気温、最高 18 度。

休息日。

日記を書く。

郵便局の ATM も午後二時まで。道の駅「オーロラタウン 93 りくべつ」に行ってみる。観光客
が訪れていた。その中には、宿泊施設のオーロラハウスを利用する人もいるようで、二階のフ
ロントへの行き方を尋ねていた。

りくべつ鉄道駅に入場無料とあったのでプラットホームに出してみる。係の女性が、いろいろと
説明をして下さる。「平成 18 年 4 月 21 日、明治 43 年国鉄網走本線開通(池田陸別間)から 9
5 年間走り続けてきた「ふるさと銀河線」が廃止されました。その 2 年後の平成 20 年 4 月 20 日、

今度は観光鉄道として「ふるさと銀河線りくべつ鉄道」に生まれ変わりました。陸別駅構内では、銀河線で活躍した列車の「乗車体験」や実際に運転できる「運転体験」、足こぎ式の「トロッコ」に乗ることもできます。」と・・・

それで、「ふるさと銀河線りくべつ鉄道」に乗車できるのは何時ですか？と尋ねると、特別な日しか乗車できません、と言われた。詰まり、週一回とか、夏の観光シーズンに運行しているわけではなかった。これでは鉄道ファンしか乗らないことになる。

それより気になったのは「幸福の黄色いハンカチ」でロケした陸別駅のスチール写真がなくなっていた。それを写真に収めたかった。妻に見せたかった。

陸別町のパンフレットで確かめると日曜日は全ての店が休業日だった。勿論、Aコープも休み。コンビニストアが大繁盛していた。

住宅に戻ると灯油ファンが燃えていた。京都の気温は何度だろう？晴れ、23度だという。こんな日は酒を呑んで眠る。

6月12日(月) 実際の気温 17° /7°

陸別町の家庭の花を見て、「礼文アツモリソウが観たい」
妻の一言で、8時20分過ぎに出発。

「道の駅」を巡って午後6時半頃に稚内に到着予定であった。
「かみゆうべつ温泉チューリップの湯」→「オホーツク紋別」→「おこっぺ」→「おうむ」→「マリンアイランド岡島」→「さるふつ公園」→「わっかない」

稚内「天然温泉天北の湯ドリーイン稚内」に宿泊。

夕食の前に、ウォーキングシューズが必要だと「ハセガワスポーツ店」で購入する。ホテルのフロントで聞いた通り、商店街は殆ど閉まっていた。この「ハセガワスポーツ店」もシャッターを下ろそうとしていた。店の奥は電灯が消されていた。

「どちらに行かれるのですか？」

「礼文島です」

「礼文なら大丈夫です」

店の主人は、私の足元を見て大丈夫だという。商売なのに売ろうとしない。すると妙なもので

買ってしまった。それも、店主が勧めたのは特価品であった。

ホテルの目の前にある居酒屋に入る。冷凍品は使わないという。明日は礼文島の宿で新鮮な海鮮が食べられるということで当たり障りなく鶏肉を食べた。

計算が合わない、と妻が言う。それは、娘からの電話で分かった。

居酒屋は席料を取る、という。

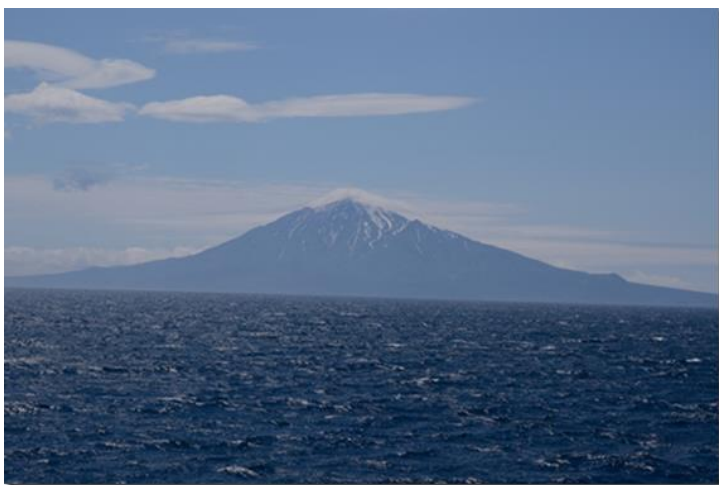
内地で有名な日本酒・焼酎の一升瓶が並んでいた。

私は外で呑むとき渋くなる。酒だけでなく珈琲などもそうである。場所・手間・人件費込の料金に渋くなる。容易く原価で手に入るものを拒む癖がついた。

ホテルに戻り最上階の露天風呂に入る。夜風が冷たい。

大浴場などと書かれた温泉に入るとき妻の手術跡を思う。まばらな湯客であればいいのだが。

6月13日(火) 実際の気温 18° /5°



朝4時。陽がさしている。眩しい。起きてしまう。

朝風呂に入る。露天風呂から眺める空は澄み切っていた。朝食は5時半から食べられる。フェリー「稚内→香深」の始発が06:20のため、昨夜フロントから団体客がそれに乗船するため食堂が込み合います、と告げられていた。

団体客が朝食を済ませたあと、7時45分頃食堂に降りて行った。

宿泊者しか車を止められない、ということで「道の駅 わっかない」の駐車場に停めた。11:05発のため、ゆっくりとフェリーターミナルに歩いて向かう。

待合所の椅子に腰掛けて待っているが一向に込み合わない。当日の二等席でも切符が取れた。なのに、一等席ラウンジを予約していた。無駄をしたのだろうか？

13:00 香深港着。

宿は2時から受け入れることになっている。港からゆっくり歩いても15分だ。男性二人も早く着いてしまって申し訳ない、と謝っていた。フェリーの到着時間に合わせて受け入れ時間を早められないのか、いろいろと事情があるのだろう。

「さあ送らしましょう」と言われたがそんな積りはなかったのが驚いた。宿の主人が間違っただ。他の客を、「桃岩展望台コース」の起点になるところまで送る積りであった。その客と私たちを違えた。女主人が慌てて「違う、違う」と言ったので、「先客が来られるまで待ちます」と言うと、「もう少し用意するのに時間がかかる」と先客が言われているので構わない、ということで夕食の時間も相談せずに出発した。

それが幸いした。宿から歩いて4時間のコースだと思っていた。お蔭で、桃岩登山口バス停より上のレンジャーハウス前の駐車場まで送って下さった。有難かった。

妻が望んだ「れぶんあつもりそう」は「桃岩展望台コース 花マップ 平成29年6月7日版」に掲載されていなかった。

「北のカナリアパーク」に辿り着いたころには、利尻富士は雲に覆われていた。バスで帰るつもりだったが、宿まで歩いた。家が崖の下にあった。海は道の下に波高くあった。

「礼文島 旅館かもめ荘」に宿泊。

昨日、初漁だった「うに」が膳に乗っていた。女主人が何度も「よかったですね、よかったですね」と繰り返した。それは、友人に聞いていた量と随分かけ離れた量だった。

「ばふんうに」が喧伝されて久しい。大方、高値で東京の料亭などで食されるのだろう。流通の便が良くなり高い旅行費を払って食べに来るほどではないのだろう。地元の人が気軽に食べるのはある意味「もったいない」ことだろう。

妻の万歩計を見ると1万6千歩だった。サッカー日本代表戦を终いまで見ることなく眠りに落ちた。

6月14日(水) 実際の気温 19° /11°

朝から雨。晴れの日が一日と持たない。
フェリーの時刻表を見ると 12:25 発がある。



手にしている予約は、「岬めぐりコース」を歩く予定だったので 17:05 最終だった。12:25 発に切り替えることにした。だが、観光案内窓口で目にした「おすすめ、雨の日の観光地」の「北のカナリア」にもう一度行き、「花の講座」を妻が受けたい、で決まった。

観光バスが 3 台停まっていた。休憩所は人が溢れていた。眺めていると、休憩所から歩いて行き、校内を見学し、戻ってきてお土産を買い、バスは出て行った。

私たち夫婦と、レンタカーで来られた夫婦と、タクシーで来られた足の悪い奥さんを連れた夫婦だけになった。

「花の講座」を受けたいと妻が言ったとき観光バスが一台やってきた。台風のように通り過ぎるのを待った。

「れぶんあつもりそう」について熱く語っていただいた。特に、盗掘にあつて桃色展望台コースは全滅した、ということであった。夏に咲いていた場所を覚えておいて、人気のなくなった 11 月に来て枯れたアツモリソウを根こそぎ盗む人がいる、山野草ブームの時には一株 4 万円近くで取引されました。育てるのは容易でないのに・・・

観光シャトルバスに 10:11 乗車しカナリアパーク 10:19 降車。2 時間ほど見学して路線バス第二差閉 12:10 乗車しフェリーターミナル 12:16 着で 12:25 発稚内行に間に合うか尋ねた。乗り合わせ時間 9 分で乗船できるのか。

「バスですから時間のズレはあります。出航 5 分前には乗船口を閉鎖しますから。バスを降り

て走っていただくことになります」ということで、13:25 香深発、利尻、鴛泊に寄港して 16:15 稚内港に着く。利尻島に立ち寄るのが妙に嬉しかった。得した心持がした。

稚内 「天然温泉天北の湯ドーミーイン稚内」に宿泊。

車はそのまま道の駅の駐車場に停めて置き下着など必要なものだけを持って入った。

夜はまたも居酒屋。礼文島で食べ残したように海鮮を楽しんだ。

酒もたくさん呑んだ。ほろ酔いで帰ったが、「天然温泉天北の湯」の女湯は気兼ねなく楽しめただろうか？

6 月 15 日(木) 実際の気温 16° /11°

宿を 8 時過ぎに出てガソリンスタンドを探す。

10135 円、高いが最北端では仕方ない。それにしても、店員の感じ良さに驚く。

昨日居酒屋で呑んだ「国稀」が美味しくて売っている酒店を教えてもらおうとしたのだが、ホテルのフロントに尋ねると、近くにあった酒店は潰れたがスーパーなら売っている、ということで向かった。

開店 15 分前であったが、「ユアーズは北海道稚内市にある卸売スーパー。日本最北端の食品アウトレット。卸売スーパー中央大壺店」の店長が対応してくれたが開店前の忙しさで「国稀は 1 種類しかありません。他店なら沢山の種類がありますから」と・・・しかし、ホームページを見ると酒類が多かった。開店前では仕方なかった。私が悪かった。結局、「国稀」を手に入れることはできなかった。

帰途は[道の駅 スタンプラリー2017]だ。

「なかがわ」→「おといねっぷ」→「ピンネシリ」→「びふか」→「もち米の里なよろ」→「絵本の里けんぶち」→「とうま」→「おんねゆ」

「おといねっぷ」→「ピンネシリ」の道の駅の間に「丹波屋旅館」があった。

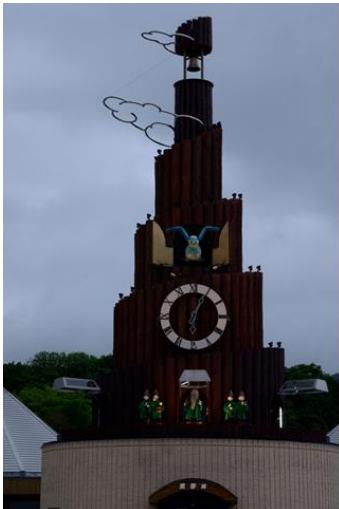
経営者の変更に伴い、『菅井旅館』から『丹波屋旅館』と改称したということだが、京都府に「丹波」と呼ぶ地域がある。丹波屋旅館と呼称したのは丹波地方出身の人だったからだろうか？



鹿が二度横切る。一度目は渡り掛けてびっくりして立ち止まりそして慌てて飛び去った。助手席の妻が、丘に立ってこちらを二匹が見ていた、と言った。

狐がよたよたと道路脇を歩いていた。首を下げてあんな風に弱弱しくよたよたと歩くものらしい。それに哀れみをかけて餌をやってはいけない。

おんねゆ「果夢林ショップ」で妻がどうしても買いたいものがあると立ち寄ったのだが午後5時で閉館だった。だが、「からくり人形と世界最大級のハト時計を組み合わせた、高さ約20mのシンボルタワー『果夢林』。時報に合わせ、さまざまな楽器を手にした森の妖精が踊りはじめると、羽の長さ約2mという大きなハト『ポップちゃん』が登場します」が6時の時報で見られた。



ガソリンがなくなってきたのでガソリンスタンドに寄り、食事処「ファミリーレストラン e'f」を紹介してもらおう。

オホーツク北見塩やきそば、干貝柱塩ラーメン、留辺蘂特産・白花豆天ぷら(5個)、を注文する。

「オホーツク北見塩やきそば」は、鉄板にのった焼きそばに“ホタテエキス”がかけられ、日本一の生産量を誇っている「玉ねぎ」が、大きな“オニオンリングフライ”として乗っている。

「干貝柱塩ラーメン」は、別皿で付いてくる“オホーツク醬”をお好みで入れるとピリ辛ラーメン

になる。オホーツク醬は、ホタテをはじめ、鮭、昆布、ハマナス、たまねぎ、にんじんなど、オホーツク産の原料が入っている。

留辺蘂特産・白花豆天ぷらが美味しかった。特産品だけ生産してはいけない。加工して初めて生産者が潤う。それにしても、白花豆を特産品に育て上げるまでどれだけの労力を費やしただろう。

「ちょぴりソフト」も食べる。こんな場所でやっていけるのかと思わせるが、何もかも美味しい。

350 キロほど走破した。疲れた。

最近『陸別』が目に入るとホッとする。

陸別に来たのは、陸別町を陶器の街にしたかったからである。

六古窯(瀬戸・常滑・越前・信楽・丹波立杭・備前)はもちろん、萩、美濃、久谷、有田焼などを戸別に販売するギャラリーを開きたくて、恰好な空き家を探した。

陸別町は何もないのが良い。

『原野に星は光る』、そのものである。にぎやかな光、にぎやかな音がない。

静かに陶器を眺めるのに適している。

このような空き家が町内に点々とあればいいのだが・・・「あるいてあるいて 花いちりんのあき家かな」

6月16日(金) 実際の気温 20° /10°

休日。

曇り空から青空がのぞく。昼から買い物に出掛ける。郵便局に行く。

買い物の前に、お勧め蕎麦屋に行く。「自社製粉でいつも挽きたて、つなぎを一切使用せず、道内産そば粉100%の手打ち」「各種雑誌に取り上げられることも多い有名店、遠方から食べに来る常連客も多数」とのこと。

お昼時なので店は賑わっていた。

「道の駅 オーロラタウン93りくべつ」施設の「ふるさと銀河線 りくべつ鉄道」に立ち寄ると

「幸福の黄色いハンカチ」のステール写真が今日は飾られていた。



その横に、ステール写真より「陸別町で酪農しませんか!!」「新規就農者募集中」、「地域おこし協力隊員募集中」の大きい貼紙があった。

「りくべつ低温殺菌牛乳」は「全国的にも珍しい自治体運営による生産。低温殺菌による牛乳本来のまろやかな甘さが引き立ちます」と「山と森のごちそうカタログ」にあった。

奨励金を出してまで酪農就農者を募るのは、自治体運営によるからだろうか。生乳を確保しなければ施設が無駄になる、ということだろうか？

Aコープに寄って買い物を済まし各家の庭の花を撮影しながら帰る。内地なら、花が植えてあっても、それは人目につかない。塀か植木に隠れて咲いている。家々の花を眺めながら散歩する。これは、都会の人にとって胸躍ることであり、在り得ないことである。



6月17日(土) 実際の気温 24° /10°

「ワッカ原生花園に行きたい」と妻の願いで向かう。

午前9時過ぎ出発。

「ワッカ原生花園」に行く前に「美しい日本の歩きたくなるみち 500選」に選ばれた「感動の径」

に寄りたい。ナビで検索しても見つからない。近くの道の駅で尋ねようということで、また道の駅「メルヘンの丘めまんべつ」に行くことにした。

普通のソフトクリームと「白い恋人」ソフトクリームを食べてから尋ねると「隣の観光案内所で聞いてほしい」といわれ、観光案内所で聞いたがここでもよくわからなかった。「感動の径」の看板が立っているということであったが見当たらなかった。だが、いまは亡き黒澤明監督の映画『鴉』（オムニバス映画『夢』第五話）のロケ地であるという。車一台通らない。ロケは平成元年（1989年）で29年前の話である。アイスクリームを売っていた娘が知らないのは当然である。



「そこより、知床斜里の『天に続く道』がいいですよ。私もつい先日行ってきて感動しました」、そこに行くことにした。

その前に昼食だが、礼文の旅館で出された食事がそこいらの海辺の民宿と同じ内容だったので（ウニは少量だったが美味しかった）、オホーツクの鮮魚が食べたくて網走回転寿司「カニ源」で昼食となった。本日のおすすめと書かれた5種類の握りを頼んだ。

網走は霧に覆われていて肌寒かったが「ワッカ原生花園」も13℃だった。「原生ってこんなものよ。ガーデンとか公園とついているのは人の手が入っているから密集しているけど、自然に咲いているのは疎らなもの・・・礼文島だって疎らだったでしょう」と、私が「花が少ない」というとそう答えた。

[道の駅 スタンプラリー2017]のスタンプ押し。

道の駅「サロマ湖」→「愛ランド湧別」

道の駅「おんねゆ温泉」に着いて妻が欲しがっている薄荷飴を買おうとしたが、「からくり王国・果夢林の館」は5時閉店だった。諦めて立ち去ろうとしたとき、6時の時報に合わせ、さま

さまざまな楽器を手にした森の妖精が踊りはじめ、羽の長さ約 2m という大きなハト「ポッポちゃん」が登場して羽を動かしたりして、やがて妖精が左右に引っこみ、「ぼっぼちゃん」も引っ込んだ。雨模様で午後 6 時と言うこともあり、観客が少なかった。

温泉に入る用意をしていたので、土曜日で人が多ければ諦めることにして、「置戸 勝山 ゆゆ温泉」に来た。



以前に来た時と同じくらいの車だった。妻に尋ねると、機会を待っていても無駄かもしれないから入りましょう、ということで入った。私は露天風呂に入ったが妻は入らなかったという。露天風呂には目の細かい網が虫除けのため張り巡らされていた。

夜 8 時頃に帰着いた。お茶漬けが美味しかった。

6 月 18 日(日) 実際の気温 20° /11°

朝 5 時半頃にトイレに起きて快晴なのを知り、オンネットーで偶然出会った友人の勧めもあり、知床五湖に行くことに決めた。

8 時 20 分発。カネラン峠を通る。このあたりの鳥は車が来ても避けない。車が避けていく。轆いたかと思ったが通り過ぎると羽ばたいていた。あわくってしまった。陸別でも、スピードを落として鴉を避けるトラックを見たことがある。トラックが通り過ぎてゆっくり鴉は飛び去った。こちらでは、車が避けてやらなければならない。

寄り道に選んだのは、摩周湖を違う角度から見たい、と第三展望台に行く。途中、双岳台で雄阿寒岳と雌阿寒岳を少時眺めた。

「どうして、第二展望台がないのだろう？」

答えは出ず、道の駅「摩周湖」にて霧が晴れているか確かめて向かう。

駐車場は小さく観光バスを誘うほどの広さはなく無料であったが外国の方が多く訪れていた。湖水は綺麗なブルーだった。日本語で色を表現すれば何色にあたるのかわからないが、兎にも角にも美しかった。第一展望台よりこちらの眺めが気に入った。眺めていると、不意と吸い込まれそうになる。神秘的、が間違いない。

[道の駅 スタンプラリー2017]のスタンプ押し。

道の駅「パパスランドさつる」のトイレはこれまでで一番綺麗だった、と妻が言った。道の駅「メルヘンの丘めまんべつ」で勧められた『天に続く道』を探したが見つからなかった。

「オシンコシンの滝」は、これまた外国の方が去っては寄せて賑わっていた。

道の駅「しゃり」に立ち寄ると観光バス3台が道路に停まっていた。すべて外国人を乗せた観光バスだった。そのうちの一台は白人を乗せていた。

昼時となり、そこを早々に立ち去り食事処を探した。「しれとこ味里」で名物そばを食べた。

道の駅「うとろ・シリエトク」に寄ってスタンプ押し。ここのトイレも綺麗。



「知床五湖」到着。高架木道の全長約800mを歩く。暑い。その代り知床連山や遙かに広がるオホーツク海が見えた。特に、一湖の湖面に映る知床連山が美しかった。一人旅している女性が二人いた。そのうちの一人に頼まれてカメラのシャッターを押した。

「家に帰って一人で見る写真は淋しくないか?」、と妻に言うと、「旅の思い出を友達に見せるかもしれない、賑やかに」と答えた。そして、「女が一人旅しているから淋しいなんて昔の話、気楽でいいのよ、ひとりは・・・」と加えた。

『『京都 大原三千院 恋に疲れた女が一人♪』が男の人は好きで、こういう女の風情にやられるの、一昔前の男は」、と妻が更に付け加えた。

高架木道からカメラを落としたと男性ガイドに助けを求めているカップルがいた。カップルが去ったあと、妻とそのあたりを覗き込んでみたが見当たらなかった。落とした者でしかわからないほど笹が覆っていた。況して電気柵が張り巡らされているので勝手に下りて取りに行くことができない。ヒグマが潜んでいるかもしれない。

高架木道の出入り口まで戻ってくると、施設員三人とカップルが落とした場所に向かって行った。

道の駅「うとろ・シリエトク」にあった地図で『天に続く道』がわかった。帰りに寄ることにした。海に向かって伸びる道は他にもあった。どうしてこれを喧伝するのかわからなかった。斜里で見られるのは此処だということだろう。人寄せに何処も苦労している。

顔がほてっている。日に焼けた。地元の日焼けした顔で帰れば、本当に一か月も北海道に滞在したのか、と問われそうだ。

6月19日(月) 実際の気温 18° /12°

天気予報とにらめっこして出掛けるか出掛けないか決めている。
今日は曇り時々晴れなので、昨日の暑さに参っていたものの近くに行くことにした。

午後2時前、クリンソウを見に行くことにした。丁度、昨日、一昨日は【ノノの森フェスティバル】第12回 クリンソウまつりがあったので混雑を避けることになった。

最短で行ける道が通行禁止になっていた。
「ランプの宿 森つべつ」のホテル散策路内に“くりんそう”の群生地があった。絶滅危惧種指定でもあるらしい。50センチほどの茎に、小さな花が数段にわたって輪生し、その様子がちょうど仏塔の先の「丸輪」に似ていることから、クリンソウと呼ばれている。

湿地などに咲くので、群生地には水辺を伴っている。外来種もあるらしい。

道の駅「あいおい」に寄ってスタンプを押す。鉄道客車が展示されていた。北海道は廃線になった線区が多く、こうして廃駅近くに機関車、客車を展示して観光に活用している。

午後5時20分過ぎに帰り着く。Aコープに買い物に出掛けようとしたところに清水さんが来られる。

ゴミだし、空き家のことなどいろいろと話しているうちにAコープが閉まる6時前になる。慌てて話を打ち切って向かう。

間に合ったのだが、閉店は3月から6時半になっていた。道の駅は6時に閉まる。それと勘違いしていたようだ。

帰り道、各家の庭の花を撮影する。そのうちの一軒から私たちより年上に見えるご婦人が庭に招き入れて下さった。珍しい高山植物が咲いていた。

「たくさんの種類が咲いていますね」

「こったらべっこ・・・」

道路脇に花は植えない、という。「雪ハネが、んでね庭の奥になげるだわ」

除雪車が雪を庭の奥に捨てるという。情景が想像できない。

「ありがとうございました」

「いやいや、なんも、したらね～」

先程、清水さんとお話した中で「天文台の近くに咲く高山植物の花を見に来られる方もおられますよ」ということであつたが、それは「3000メートルの山に咲く、山の花の女王といわれる『こまくさ』ですよ。陸別の方の御庭に咲いていますよ」、と妻が言うと清水さんは驚かされていた。

「れぶんあつもりそう」とまでもいかないが、「こまくさ」なら十分観光に役立つ。



ルピナスが咲いている。妻は種が欲しいという。移植は根付かないという。庭いじりをしてい

た夫人が、自然に増えていく、と言われる。Aコープに種が売っていないか確かめる、と妻が意気込んで言う。

6月20日(火) 実際の気温 18° /11°

午前6時起床。

生ごみを捨てて、8時「風のガーデン」に向けて出発。

9時半前後に道の駅「ピア21しほろ」で休憩する。

10時頃、道の駅「うりまく」に立ち寄る。ここから休まずに、道の駅「南ふらの」でスタンプを押すためひたすら走る。午前11時過ぎに到着。

時々目にする畑の真ん中にポツと1本・・・これは入植した際に最初に家を建てたときに植えたもので、家の場所を変えても開拓をした初代が植えたものは切れない、ということらしい。防風林として機能しないが農作業の休憩時に日陰となる。

「風のガーデン」に向かう前に、昨年も訪れた富良野「そば屋十六文」で蕎麦を食べる。相変わらずおかみさんが忙しく立ち働いている。私たちが店を出ると擦れ違いに若い二人連れが入っていくと、女将さんが出てきて閉店の看板を掛けた。

午後一時過ぎ「風のガーデン」に到着。

女性は花好きなのか女性グループが多い。そして、ここも外国の方が多い。カップルの女性がハシャイデいる言葉を聞いていると韓国語と中国語が多い。写真を撮る人が多く、自撮り棒がそこかしこに立っている。

「ニングルテラス」を巡り「珈琲 森の時間」に下って行く。



ブレンドコーヒー600円だった。自分でコーヒーミルを回すカウンター席は満席だった。雰囲気とテレビは絶大だ。

陸別の、cafe & うつわのお店「tomono」は元簡易郵便局兼商店を改装したという。陸別町の市街地から車で15分、周囲に何もないので「はぐれカフェ」なんて言われているらしい。

「ギャラリー落紫舎」の私の手作り小屋のウッドテラスである。ここで私は十分と思っているが世間の人はどう思っているだろうか？



4時過ぎ、花「ラベンダー」探しに行く。そば屋の庭のラベンダーが咲いていなかったのでも開花していないだろうと思いつつ「富田ファーム」を訪ねると、やはり咲いていなかった。

午後5時40分、富良野駅横のホテルに着く。日本人は泊まっているのだろうか？夕食は、「くまげら」に出掛ける。居酒屋に行くことがないので、高いのか安いのかわからない。女の子(留学生?)が多く働いていた。店の従業員が不足しているのか、台湾・中国などから多くの観光客が来るのか、その対応のために雇っているのだろうか？これは、斜里町の飲食店でも見受けられた。その店の女性従業員はフィリピン人だったのだろうか？

それより、店の横にサクランボが鈴生りに成っていた。鳥除けに網とCDがぶら提げてあった。一つ取って頬張ってみたかった。

禁煙室・セミダブルベッドの部屋。65歳の老夫婦には拷問のようであった。明日は、また花見。

6月21日(水) 実際の気温 21° /13°

花を観る前に「青い池」に行くことに昨夜相談して決めていた。

「青い池」が観光地として急浮上してきた。昨年、9時頃には人で溢れたので9時までに見てしまうことと決めた。8時に出発。8時40分に到着。

池沿いに歩いて引き返してくると高校生の集団が入れ替わりに池に向かっていった。呑みこまれてしまうところだった。

『北西の丘展望公園』に行く。そこに数軒の店が並んでいる。その中に並んで二軒の写真館があった。

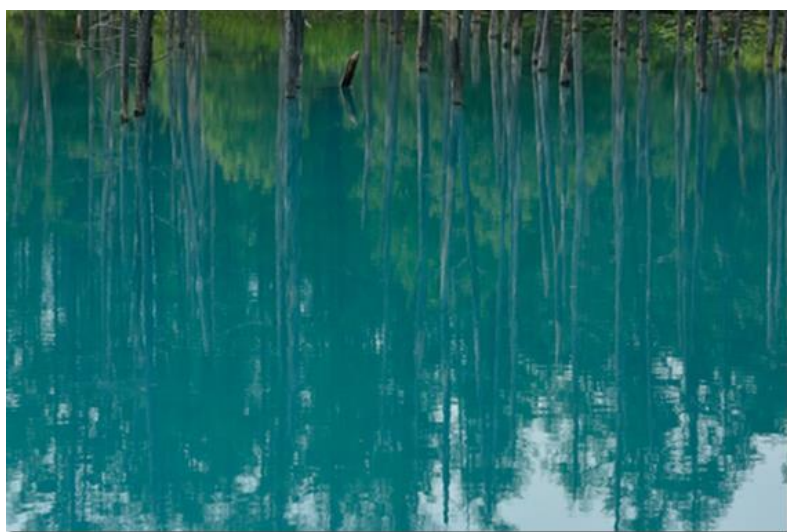
そのうちの一軒で、「写真家である夫が17年前の冬に撮った写真です。このころは笹が蔓延っていて誰も入ることができなくて、熊もいますしね」と「雪の青い池」の写真を見せてもらう。川を堰止めたころは、池に立っている木々は高かった。

外国の方と修学旅行の生徒たちで賑やかだった。

修学旅行に来ていたのは、京都「城南菱創高校」だった。妻は新任で宇治に住んでいたから、それとなく尋ねていた。

「城南高校と西宇治高校を統合し、西宇治高校の校舎を利用して開校しました」という説明で、妻は懐かしがっていた。城南高校前の店でよく食事したけどどうなったのかな？それには、40年以上前の話だから生徒が首を傾げるのも無理ない話だった。

引率の先生が「次は『青い池』』」というと、「また、やまのなかあ～山行き過ぎいー」と女生徒が言った。その口振りがおかしくて妻と何度も真似して笑った。



北西の丘展望公園の観光案内所で教えてもらった「丘のまち びえい ふるさと市場」の棚に作物は殆ど残っていなかった。アスパラを買う。二日後に収穫が終わるという。

もうひとつ教えていただいたのが、「フェルム ラ・テール 美瑛」に隣接する「愛を積むひと」(2015年公開)のロケ地。ロケ地に選ばれる場所は本当に足を止めてしばらく眺めていたいと思える場所ばかりだ。

そして、北海道ブルーリストにも記載されているコウリタンポポが綺麗に群生していた。(コウリタンポポにはもう一つの別名もある。エフデタンポポとかエフデギクというのである。首の長い立ち姿が絵筆を思わせるからその名がついたらしい。なかなか優雅なネーミングだ。この名前も外国の影響で生まれていた。アメリカに導入された時につけられた名前が「ビーナスの絵筆」。そこからエフデタンポポの別名が付けられた。ところが、アメリカではこの花のあまりに強い繁殖力のためにいつしか「悪魔の絵筆」と呼ばれるようになったことは意外に知られていない。天使から悪魔に変わっているのである。)

次に今日の目的の一つである「四季彩の丘」に向かう。

日本人に会うのが珍しいと思えるようになっていた。「ラベンダー」は咲いていなかった。それにしても広大だ。昨年も遣って来たが、また広くなったのだろうか？全体は、未だ満開にほど遠かった。

午後一時を過ぎていた。昼食に「富良野ワイン工場」のラベンダーを見てから、「ふらのワインハウス」で一番人気の「チーズフォンデュ」を食べる積りであったが、ラベンダーがまだ咲いていないことは分かっていたし、チーズフォンデュは京都でも食べることができる。なら、本場のマトン？ラム？(羊)肉が食べたくなった。

「ひつじの丘」で食べることにした。

給仕してくれた青年が京都・右京区(嵐山)出身だと自己紹介してくれた。私たちの住む地元のことでも盛り上がった。彼は住み込みで働けるところを探して日本全国を回っており、前に訪れていたのでここで働かせてもらっているということであった。

初めての羊肉は美味しかった。臭みを取るために調合した液に漬けているのだろう。会計支払いは店長が受け持っていた。

「北海道は初めて？」

「いえ、僕は家内より一回多く、五回目です」

「北海道何日目？」

「もう、二十日程居ます」

「なんで？」

「二地域居住地探しです」

「移住するの？」

「その体験、ちょっと暮らしです」

「何処に？」

「日本一寒い陸別町です」

「何処？…どこの空港が近い？」

戸惑った。北海道の方が知らない。小さな、2,500 人程の町で、日本一寒い陸別町ですが…

「…女満別空港ですか、大阪、伊丹から直行便が飛んでいるかもしれない？」

「だれも乗らないね。だから飛ばせないよ」

「…」

「何して食べているの？」

「酪農と林業…その他これと言った産業はないようです…」

「終いに無くなるよ…暮らしていけないよ」

これが現実なのだろう。

「ふらのわいん工場」に行く。

ワインの試飲を妻がしたが、最前の「ヒツジの丘」で呑んだビールで酔ったらしく味がわからないと言う。それなら、ということでブドウジュースを試飲する。酔った体に頗るおいしいと妻が言う。

ブドウジュースと限定キングサイズワインを買う。

陸別町のお土産をまだ買っていない。「キトピロの塩」「キトピロの味噌」はどうだろう？キトピロはアイヌ語で行者にんにくのことである。陸別産のキトピロが使ってあればお土産に相応しい。

道の駅「自然体感しむかつぶ」でスタンプを押す。

道の駅「樹海ロード日高」でスタンプを押し、274号線で帰途に就く。だが、清水町へは土砂崩れで通行禁止だと、遮断ゲートまで来て引き返す。

そこで、道東自動車道「占冠」から「十勝清水」まで無料ですからそれを利用して帯広方面へ行ってください、ということだったが、「十勝清水」の料金所を通過すると1,410円課金された。

遠回りした所為か、200キロ走らなければならない。雨が降るところ降らないところを走りながら、たっぷり時間があるので、信号のない直線道路が眠気を誘わないためにも、陸別町の行く末について妻と話す。

「町長が観光を勧めて下さったから観光ばかりしているけど、『ひつじの丘』の店長の言葉は切実だったね」と妻が言う。

『ひつじの丘』の店長、「陸別の人は何で食っているんだ」

酪農と林業・・・銀河の森(オーロラ)天文台、陸別(ふるさと銀河)鉄道、日本一寒い町で観光客を呼び込んでいる・・・と挙げると、

「星が綺麗だから銀河の森で売っているのかもしれないが、北海道の何処彼処もそれをうたい文句にしている。ここも(星に手のとどく丘)で売っている」

そういえば地元「天文館パオ」がある。

「天文台など都心でもあるだろう、京都なら嵐山トロッコ列車があるだろう・・・」

京都右京区・嵐山出身の従業員の方を見て続ける。

「日本一寒いってマイナス要素だろう。誰がそんな寒いところに住む？」

確かに、である。

「陸別町紹介動画、『PRショートムービー「りくべつ 夏」』を作成して頑張っています」

「誰に対してPRしているんだ？」、と店長。

私にもわからない。

「さっきから気になっていたんだけど、『四季彩の丘』って農協が開設して運営しているのかしら、それとも個人企業？」

そうって、妻が流行りのスマホで検索を始めた。

陸別に帰り着くまで時間はたっぷりある。
記事を探し当てたのか拾い読みを始める。

「四季彩の丘を始めた7年前に『展望花畑 四季彩の丘』を開設したのは、美瑛町農協の理事でもある熊谷留夫……丘陵に花を植え、都市からの観光客を呼び込むことを思い立つ。しかし、当初は周囲を説得してもその価値を理解してもらえなかった。四季彩の丘は99年から着手し、2001年にオープン。すべて熊谷が一人で始めた。約20年前から美瑛町農業協同組合の理事を務める熊谷は、かつて農協にその開設を何度も働きかけた。しかし、理解は得られなかった。

『そんなに儲かるというのなら、熊谷さんがやればいけないか』

熊谷は、その言葉で踏ん切りがついた。そうして7年前に、花作りの経験などない熊谷の手によって、四季彩の丘はオープンされたのだ。

美瑛の人々の意識も変化が起きてきた。最初は遠巻きに熊谷の取り組みを眺めていた農家や農業関係者たちも、道内の新聞やテレビが積極的に四季彩の丘を取り上げ、訪れる観光客が増えるようになると、熊谷の事業に共感し、感謝してくれるようになった。

また、熊谷は四季彩の丘を始める約10年前の92年にはペンション「ウイズユー」を開業した。また、これも実現するまでには大きな困難があった。

ウイズユーは上川地区での初めての農家ペンションであり、人々の農家ペンションに対する理解もなかった。不動産業者による農地買収が盛んだったバブル期の名残もあって、農地転用に対する人々の目にも厳しいものがあった。農業委員会から許可が下りた後ですら、道内の経済誌に熊谷の行動を批判する記事を書かれたりもした。地元の人々の悪意の中傷がその記事の元になっていた。

熊谷の家は水田を中心に畑を含めても10haもなく、北海道では小さな部類に入る農家だった。折から生産調整を機に離農するという人が町内にいて、7haの規模拡大ができた。それでも15ha。北海道では小さな規模である。しかし、丘の町と言われる美瑛にあっても熊谷の農地は平場の水田がほとんどだった。当時であれば十分に食べていける規模だった。半年は農業をして、冬には好きなことをやって暮らすのが北海道農業の良さだと思っていた。

「観光ばかりしては申し訳ないね」

「・・・喧噪のない、歩いて回れる小さい町が理想で陸別町を選んだけど・・・」

「・・・でも、動くとしてもヘイ・オン・ワイには古城があるでしょう、陶磁器のほかに観光客を呼べるものがある？」

「だから、町全体で呼ぶ。萩にしろ、備前にしろ、美濃にしろ、それぞれの窯業地で展示販売しているが、すべての窯業地の作品を一堂に置いているところはない、それも有名作家の・・・売るほどの景観もないし、古城のようなものもないから空き地一面に花を植えて奥さんを誘い、夫は陶器を見る。「高山植物の女王」として知られるコマクサ(駒草)を育てれば、見たくて仕方ない山好きがやってくる。夫がジャズ好きならジャズ喫茶を建て、妻は陶器を見る。子供がいれば、りくべつ鉄道に乗る。星が好きなら天文台に行く。牛が好きなら牧場に誘う。降るほどの星の下でキャンプを張りたいならキャンプ場を造る。宿は、「浜田旅館」。星空のやど夢舎 コテージ村。温泉は置戸温泉に行ってもらう。日本文化のお茶、生け花、書道も必要。英語を話せる人も配置。兎に角、旅行、観光を兼ねて来てもらえるように空き家を一軒ずつギャラリーに整備して町全体を陶磁器の町にする」

午後 10 時前に帰り着く。

6 月 22 日(木) 実際の気温 19° /15°

カーテンを開けると木々が揺れて風が強い。休息日。

午前 8 時半、清水さんが私の前半日記を記録したSDカードを返しに訪ねて来られる。明日、東京に出張する、と告げられる。移住者を募る説明会があるのだろうか？
そして去り際に、これまで町興しの提案がいろいろなされてきたのだろうか、「町は動かない」といわれる。私に、頑張っていたと、と言われて役場に向かわれた。

清水さんは埼玉出身だ。余所者である。お父さんが5歳まで陸別に住んでいた縁があって、小さいころはおじいちゃんおばあちゃんの家で春・夏・冬休みなればお世話になり、大きくなってからは休みを利用して来ていたという。おばあちゃんが、職員募集しているよ、って連絡してくれて・・・前から此のあたりに住みたいとお願いしていました。

忘れないうちに、終日日記を書く。

忘れないうちに写真を整理する。



6月23日(金) 実際の気温 24° /14°

午前5時半起床。

朝日が雲間から漏れている。

天気予報を確認する。晴れるなら花のガーデンめぐり。

なかなか結論が出ない。

漸く、帯広は晴れるという予報で10時過ぎ出発。

行先は「紫竹ガーデン」。

10時出発。帯広は豚丼が美味しい、ということで立ち寄った郵便局の駐車場で地元の婦人に美味しい店を尋ねる。

「私は脂気が多いのは好きでないけど、多くても構わないなら、『ぱんちょう』に行かれたら」だが、取り敢えず「紫竹ガーデン」に行く。

ブログに「お金を取って見せるなら雑草の始末をして」とあったが、パンフレットと違い酷い物であった。それにしても、「北海道ガーデン街道 八か所」の一つになっているが、駐車場は狭く観光バスは道端に止めるしかないだろう。関西の旅行会社が送ってきたパンフレットに『北海道ガーデン街道全八か所をめぐり名湯でゆっくり寛ぐ華の北海道3日間』が掲載されていた。見事に咲いている「花の紫竹ガーデン」が映っていた。

車中、携帯電話が鳴る。娘が昼休みになったのでメールを送ってきた。「小林麻央さんが亡くなった」という内容だった。午後2時半から会見があるという。

妻が同じ病気だから心配して娘が送ってきたのだろう。

「豚丼で腹を満たせば『紫竹ガーデン』の怒りも収まる」と向かい掛けたが、道の駅「なかさつない」が近かったのでスタンプ押しに行く。

そこから「六花の森」が程近いと知る。ここも「北海道ガーデン街道 八か所」の一つになっている。これまで訪ねた「北海道ガーデン街道 八か所」の「紫竹ガーデン」を除いて従業員がそれなりの作業服を着用して多く働いていた。「紫竹ガーデン」は近所のおばさんたちがお手伝いに来ているようだった。こちらが挨拶しても返してこなかった。

「六花の森」は綺麗に整備されていた。

「レストハウス&ショップはまなし」でランチの時間が過ぎていたので、「マルセイアイスサンド」を食べる。「りくべつミルクのおあずけプリン」(プレーンとかぼちゃ)とどちらが好みだろうか？この店員の対応は始終笑顔だった。

「早く家に帰りたいね」と妻が言う。

二十日過ぎて陸別を「家」と言うようになっていた。



静かで、ゆっくりと時間が流れている。ここは取り残されたようにひっそりしている。だけど、穏やかな暖かさがあふれる。

人が作ったガーデンや公園にない落ち着きがある。『家』に帰りたいと思うようになっていった。「家」に帰り、近所の花を眺めながら散歩がしたい。

3時半頃に帰宅の途に着く。帯広を横切るのに幾つもの信号で止まった。都会の景色はどことも同じだった。これでは、午後6時に帰り着かない。

音更木野SS・ENEOSのガソリンスタンドに寄る。10126円。

セルフとある。店員を呼ぶ。セルフガソリンスタンドは二度目だ。丁寧に教えてもらう。

「陸別はこの道でいいですか？」

陸別を知らない、と高校をこの春卒業したての若者が言う。

「足寄の先」

「足寄なら、『ネイパルあしよろ』に体験学習・宿泊研修で行きました」、でも陸別は知らない

いう。

道が直線になると、北海道の食事は概ね満足したが、これまで食べた中で不味かったものを妻と話し合った。道の駅「流氷街道網走」「しれとこ味里」の料理は不味かった。ガーデンと呼ぶに相応しくないと思ったのが、「紫竹ガーデン」で、これまで通り田舎のおばあちゃんの庭でよかった。

道の駅、「オーロラタウン 93」で予約していた「りくべつ低温殺菌牛乳」の受取時間に間に合わなかった。午後 6 時 10 分位にAコープに帰り着く。

6 時半に帰宅してテレビを点けると「北海道ちょっと暮らし利用ランキング」平成 27 年度実績を放映していた。1 位が釧路だった。陸別は利用者数等上位 10 市町村で表示されなかった。

6 月 24 日(土) 実際の気温 20° /13°

妻が起きて、小林麻央(享年 34 歳)のテレビニュースを見ている。

続けて「ひよっこ」を見ている。

「窓の外は雨 雨が降っている♪」掃除。

買い物先の相談。足寄駅まで 34.1 キロ、グリーンコープ津別まで 38.3 キロ、イオン北見まで 54.4 キロ。結局、Aコープに決まり。

晴れ間が出てきた。寒いと思って重ね着をしてきたが暑かった。

町を歩くときはカメラをいつも携帯して写真を撮っている。野菜を植えている同い年くらいの男性に声を掛ける。

「ここはみんな勝手に好きなことをしている。若い者は出ていきたければ出ていけばいい。死ぬまで楽しく暮らせればいい、その先のことは知らない」

でも、それなのに人口は横ばいだという。高校を卒業して出ていけば代わりに若い人が遣ってきているという。

平成 26 年 7 月頃は 2,595 人で平成 29 年 4 月現在は 2,482 人である。これを、おおらかに「なあんも、横ばいだべ」というのだろう。

その場を辞して「イベントなどは移住した人が遣っているのだろうか？」と言うと、「コウリンタンポポ、ね」と妻が言った。

しかし、陸別の良さは小さい町につきものの「プライバシーの無さ」がここでは無縁である。適当にほっといてくれる。

こちらが求めなければ、「陸別移住を応援する会」に声掛けしなければ、「陸別移住を応援する会」からの声掛けもなく宿を借りているだけである。野尻町長も、移住について、二地域居住について質問されなかった。ただ、観光を楽しんでください、と謂うことだった。

通りに飲食店がある。陸別の人はよく利用しているのだろうか？パン屋が無くなった、と言う。食堂が一つあれば事足りる小さな町だが・・・「コミュニティプラザ☆ぷらっと」に「レストラン陸別天地」「すし藤」「居酒屋花むすび」がある。町外からくるサラリーマン・役人・森林関係・酪農関係などをもてなす場所として必要だろう。

Aコープで酒の肴を買う。酔った目で写真の整理。



6月25日(日) 実際の気温 17° /12°

6時起床。

今日も薄暗い。こんな日は出掛けない。音楽を聴いて日を過ごす。

持参した、倉本聰「ゴールの情景」を読み始めた。そういえば、倉本聰も余所者である。東京と同じように北海道も余所者の寄せ集めかもしれない。それなら、夢と希望がある。そして、成功と挫折がある。

外は雨だがお土産を買いに行くことにした。「果夢林ショップ」で薄荷飴の詰め合わせを買う。妻が、おかしいと言う。前に来た時に、500円くらいと思っていたのに・・・実は私もそう思っていた。500円なら安いと思ってお土産に買って帰る積りであった。それが、800円で売られていた。

私たちが間違っ覚えていたのか？店員が間違えて値札を貼っていたのか？それとも、値上がりしたのだろうか？

前に一度食事して美味しかったので、「ファミリーレストラン e'f」にて昼食。「オホーツク北見塩やきそば」、「ハンバーグドリア」、「おすすめのハンバーグステーキ」を二人で食べる。

隣の客が出掛けに「お先に済みませんでしたね。私たちが入ってきたときにはもう席に座っておられたのに、店員を呼ばれなかったから遅くなってしまい・・・」と謝りを口にして出て行かれた。そういえば、呼び鈴を押さずに客が引くまで待っていた。

道の駅「おんねゆ温泉」から帰り道、道の駅全てで地元の窯元が陶器を売っている、と妻が言った。私もそれに気付いていた。

美濃焼の美濃市と姉妹都市として提携しているのか、道の駅「ピア21しほろ」に美濃焼が紹介してあった。

全国陶器まつり(全国陶器祭り振興会)が帯広・釧路で開催しているらしい。もう終わったかもしれない。それが成功しているなら、陸別で陶磁器の「ギャラリー落紫舎 陸別」を開店するのはいいことである。



午後3時前に帰り着く。空き家を見て回る。

「北海道ちょっと暮らし利用ランキング」平成27年度実績1位の釧路の様子を見に行かなければ、と酒を口にしながら思っている。

午後7時からJリーグ・ガンバ大阪の試合中継があるから、酔って寝てはいけない。雨の夜に素敵な時間を貰っている。それまで、倉本聰「ゴールの情景」を再び読みだした。そして、試合が始まるまで写真の整理をする。

6月26日(月) 実際の気温 17° /12°

何度も灯油ファンが点いた。

木々が揺れている相変わらずのカーテン越しの朝である。

陸別の人は風に弱い、という。

扇風機の風を涼しいと感じるのだが、こちらの六月の風は寒い。

11時になって、「おけと勝山温泉ゆうゆ」が今月の「ふろの日」だから入りに行くことにした。
ポイント5倍、アイスクリーム200円が100円、ビール500円が250円だった。

空腹では不味いということで食事を摂ることにした。

ラーメンセット、うどんセットを頼んだ。「ふろの日」だからビールが半額だった。妻に頼んだ。
すると、妻が、大好きな推理ドラマを真似て、「保険金殺人だ」「そういませんか?」「おまえ
だって、ふろの前にビールを飲むか」「私だって、ビールは風呂上がりに飲みたいと思います」
「だろ」「風呂に入る前に飲ませて溺れるか倒れるか狙ったんだ」「これは殺人ですね」

そう言って妻は呑んだ。

酔いを醒ますために従業員に何時過ぎれば少しは空きますか、と尋ねて、置戸「オケクラフ
トセンター森林工芸館」に行く。

白樺の木で作った器を購入する。

『ギャラリー落紫舎 陸別』ができれば、程近くに置戸から木工作家を呼んで工房を作っ
てもらうのもいい。丁度、フードセンターが空き家になっている。あれなら、木工の器械が置ける
だろう。

置戸駅の、コミュニティーホール「ぼっぼ」に寄り、素人画家の絵を観て1時間ほどして戻っ
てきた。思い出ノートのようなものに、関東から訪ねて来た人の名前が数名記されていた。
『文化の町 置戸』と、上手く観光に結び付ければ遠くからでも観光客は来る。

露天風呂に浸かり湯花の浮遊を見ながら、今更ながら野尻町長は私たちに「ちょっと暮らし」
の目的をどうして尋ねられなかったのだろう、と考えた。

仮に私が町長なら、第一に子供連れの夫婦、第二に若い独身男女及び若い夫婦、第三・四が無くて第五に年金暮らしの老夫婦が移住することを望む。

「やるなら一人でやってください。それなら、私たちは反対もしないし頼まれなければ手助けもしません」

4時半ごろに帰ってきた。

暖かい部屋で炊き立ての「ゆめぴりか」を食べビールを飲む。何の憂いがあるだろう。

この家で床に就くのも残り4夜だ。

今夜も写真の整理をする。



6月27日(火) 実際の気温 19° /11°

放送で起床。

早速テレビを点ける。

藤井4段 29 連勝、新記録がトップニュースである。すごい中学生だ。「君達女の子 僕達男の子ハイハイハイ ハイハイハイおいで遊ぼう 僕らの世界へ走って行こう♪」、私が中学生だった頃、こそこそしていたように思う。あれだけのカメラの前で堂々としている。「ほんと、おっかねえ」

「北海道ちょっと暮らし利用ランキング」平成 27 年度実績第 1 位の釧路を確かめたかった。

観光地を検索したが何もなかった。釧路湿原と阿寒湖だった。

写真に収めるには、摩周湖なら私のようなものが撮ってもそれなりに映るのだが、この季節の釧路湿原と阿寒湖は無理だった。冬こそなれば、と思う。

それならと午前 10 時前に道の駅のスタンプ押しに出掛ける。

「阿寒丹頂の里」に行く。カネラン峠を少し下ったところに砂利が敷き詰めてあった。「とかちであそぶ観光MAP」に未舗装と書いてなかった。しばらく下るとまた敷き詰めてあった。そしてまた敷き詰めてあった。この前に走った時から少しの間に砂利が敷かれていた。タイヤが滑る。

12 時前に着く。「赤いベレー レストラン鶴」で食事をする。昼食時とあって混んでいた。一番人気「阿寒ポーク とろ玉かつ丼」を食べた。

次の道の駅「しらぬか恋問」に到着。砂浜に行く。太平洋だ。妻が、拾う貝殻がない、と歩き回って言う。

「恋が叶うポスト」。このポストの裏に、思う人に手紙を書いて投函するように、と促すメッセージが書いてあるのだが最早この歳に無縁だった。だが、一生の間に一度でいいから思いを告げたかった、と言う人もいるだろう。この歳になって胸に仕舞っておけなくなった人もいるだろう。この殺風景な景色の中でこそ伝えたい。

同じ道を引き返して帰るのも芸がない、と言うことで白糠に向かう。自動車専用道路(無料)を行かずに 392 号・274 号線で帰る。浦幌に近づいた山の中で「くりんそう」を見つける。道路の下に沢がある。その脇にてんと咲いていた。道路脇にも飛び飛びに咲いていた。これだから、脇道を走るのは楽しい。

これに気をよくして、道の駅「ステラ★ほんべつ」で相談して、足寄駅から「もろこし街道」を辿った。

私たちの後ろに神戸ナンバーの車が續いていたが、余りにゆっくり制限速度で走ることに苛立ったのか追い越して行った。大方、阿寒湖方面の宿に向かって急いでいたのだろう。

「螺湾」と標識が読めた。このあたりに松山千春が背比べしていたラワンぶき自生地があるのだろう。それなら、松山千春の生家に寄って行けばよかった。

5 時前に帰り着いて清水さんに電話をする。着信音が鳴っているが出られない。仕事が混んでいるのかもしれない。いよいよお別れの日が近づいてきたので退去についての取り決めがあるのか教えていただこうと思った。午後 6 時前に、わざわざ訪ねてきてくださった。

玄関先で、これまで日記に認めた事柄を手短かに話させていただいた。

「ギャラリー落紫舎 りくべつ」の案を思いつくままに書く。

- ・歩いて見て廻れる距離の空き家を探す。
- ・空き家は町が持ち主に交渉して用意する。または、ギャラリーのオーナーが探して用意する。
- ・空き家の改装は町が行う。または、それぞれのオーナーが DIY で行い、材料費を町が持つ。
- ・オーナーは「tomono」の坂井さんをはじめ友人・知り合い及び陶磁器に興味のある方を募る。
- ・空き家一軒毎に萩焼・備前焼・美濃焼等と異なる窯業地の作品を扱う。
- ・当初の作品は「ギャラリー落紫舎」が用意する。
- ・有名一流作家の作品に限る。
- ・備前 人間国宝 伊勢崎淳の弟子、Jeff Shapiro(ジェフ・シャピロ)など外国人作品も扱う。
- ・お土産屋にならないこと。
- ・静かで落ち着いた街を守ること。
- ・空き家を改装したギャラリーの周りに花を咲かせる。
- ・各家に協力してもらい庭に花を咲かせてもらう。種苗については町が用意する。できるだけ北海道在来の草花が良い。
- ・高山植物の女王「コマクサ」は絶対に必要。
- ・北海道産の日本酒・ワイン・焼酎を用意する。
- ・北海道の窯元の作品を一堂に集めて展示販売する空き家を探す。改造など「tomono」の坂井さんが中心になって行う。
- ・英語が話せる人が一人は欲しい。
- ・抹茶を立てられる人が一人は欲しい。
- ・外国人が来れば、生け花・習字を体験学習させられる人が一人は欲しい。
- ・宿泊施設は町内の施設と協力する。
- ・史跡・りくべつ鉄道・天文台・牧場と連携を取り、移動はゆっくりと行えるように、竹富島のように牛車及び馬車でできれば最高である。
- ・その移動については、耕運機・マイクロバスを「陸別自工」の社長にお願いして涼風が体で感じられる客車に改造してもらう。
- ・温泉は「勝山温泉おけとの湯」と連携を取る。
- ・町内天然芝サッカー場を活用する。家族の一人が陶磁器を見て回っている間、家族及び友人にフットサルをしてもらう。
- ・星空の下のキャンプ場を造る。
- ・ジャズ喫茶を作る。
- ・ジャズ喫茶でピアノ演奏できる人を一人は欲しい。
- ・ジャズ用オーディオ装置 JBL 及び Accuphase が必要である。
- ・キャンプ・フットサル・庭の花・陶磁器・史跡・りくべつ鉄道・天文台・牧場・酒・温泉・コテ-

ジを組み合わせる。

・漫画・古本を集めて図書館で読めるようにする。

見つけていた空き家を思い出す。

私の想いを伝えたので今夜は心地良く寝られる。

その前に、最近寝る前の日課になった写真の整理をする。



6月28日(水) 実際の気温 23° /11°

退去する前に、庭の雑草を刈って綺麗しておくように、との申し合わせ事項があったが、今朝取決め事項を読み返して知った。庭の雑草は、確認するとそれほど伸びていなかった。

庭に物干し台が備えてある。

これまで家の外に洗濯物が干してないことに気付き、それを不思議に思っていたが家の中で乾くことを知った。

妻は、地元では梅雨だと2・3日でも洗濯物がすっかり乾かないので、また陸別は寒暖の差が激しいと聞いていたこともあり肌着から洋服までたくさん持参していた。

でも、ただの憂いごとであった。

夜に洗濯して干して翌日外出から帰宅すると、大抵一日位で乾いていた。そして梅雨というものが内地と違っていると知った。

陸別に惜別の意味を込めて11時頃に散策に出る。

徳富健次郎『みみずのたはごと』に陸別について書かれた箇所がある。

「陸別は古来鹿の集る所で、アイヌ等が鹿を捕るに、係蹄にかゝった瘠せたのは追放し、肥大なやつばかり撰取りにして居たそうだ。鮭、鱒、なぞは持ちきれぬ程釣れて、草原にうちやつて来ることもあり、銃を知らぬ山鳥はうてば落ちうてば落ちて、うまいものゝ例にもなる山鳥の塩焼にもいて了まった。たゞ小虫の多いは言語道断で、蛇なぞは人を避くことを知らず、追われても平気にのたくって居たそうな。寒い話では、鍬の刃先にはさまった豆粒を噛みに来た鼠の舌が鍬に氷りついたまゝ死に、鼠を上げると重たい開墾鍬がぶらり下ってもはなれなかった話。」

昭和61年 カナダ・ラコーム町と姉妹都市提携調印が成されている。

焼き物の窯があったのだろうか？

道を間違ったところに町営サッカー場があった。蹴ってみたいと思う。サッカーの監督をしていた時、北海道に合宿で来たことがある。その当時珍しかった天然芝コートに憧れて来た。

関寛斎のことは何も知らない。消防署横の広場に銅像がある。「関寛斎診療所」と名付けられている。陸別にとって特別な人であることはわかる。

「国指定 史跡ユクエピラチャシ跡」(青龍山)に行く途中道に迷う。

ユクエピラとはアイヌ語で「鹿・食べる・崖」の意であり、チャシ跡はアイヌ文化期(13～18世紀)の砦跡と言われている。擦れ違えない登り道になった。



一向に、駐車場に出ない。暫くして「陸別配水池」と書かれた建物の前に出る。ここで引き返した。

太くて長い蛇に出くわした。

先程の、徳富健次郎『みみずのたはごと』に「蛇なぞは人を避くことを知らず、追われても平気にのたくって居たそうな。」とある。車が通り過ぎて振り返ると平気にのたくっていた。最前追い越した散歩中の老夫婦にまた出会った。

「この間も見物に来られた千葉のご夫妻も間違っただけでまた引き返してこられましたよ」
立て看板が小さくて判りづらいですね、と言われた通りの看板だった。

それより、「大きな蛇に出くわしましたが、蛇がいれば蝮もいるでしょう？」と聞いた。
「蝮はいませんよ」とはっきり言われた。私の中では同じ蛇なのに、と納得いかなかったが、野尻町長も「蝮はいない」と断言されていた。

漸く駐車場に着いて白樺の道を歩き始めた。此方を見ている目に遭った。

關寛翁碑文に行き当たった。

(青龍山)から陸別の街を見下ろしているところらに向かって三人の人影があった。

陸別の街を眺めようと思ってこられたのだと思ったが違っていた。「この人たちを案内してきたのです」と一人が言われた。関寛斎の生き字引という斎藤さんという方だと後で清水さんに教えていただいた。

徳富蘆花を通してトルストイ主義に近づき、とあるのだが、私は陸別町の牧場の牛舎？に掲げてある「キリストは永遠の命を与える 聖書」と寛斎が関係しているのか気になっていた。それはところどころの牧場に掲げてあった。

陸別町には立派な本證寺・妙法寺・正見寺・円覚寺が国道 242 号線に並んで建っている。

銀河の森天文台(りくべつ宇宙地球科学館)まで山道を歩き辿り着いたが開館前だった。コマクサが咲いていた。山道を下った。



退去のため部屋を片付ける

6月29日(木) 実際の気温 21° /14°

朝8時、清水さんが来られる。鍵を渡す。8時13分出発。小樽まで時間を要す。出港に間に合わない事態が起きて乗船できなければ困る。それから、北海道にもう来られないかもしれない、と[道の駅 スタンプラリー2017]冊子のスタンプ押しのため、予定を一日早めて陸別を去る。

9時丁度に「道の駅おんねゆ温泉」に着く。
からくり人形が動く。ショップに行き薄荷詰め合わせの価格を確認する。800円だった。

20分ほど居て、次第に陸別から遠ざかっていく。
道の駅「丘の蔵 美瑛」に到着。美瑛駅の隣だった。

昼食は「カフェレストランおきらく亭」のおすすめ「ポトフ」を食べる。シャンソンが流れていた。
「ラベンダーが見たくて、一週間前に来てもう一度寄ってみたのですが・・・」
「例年ならもう咲いていますが今年は寒かったのでまだ咲いていませんね」
「愛を積むひと」のロケ地までの道を尋ねる。まだ観光地としては新しいので地図に掲載されていない。

ところでこの近くにあった風呂屋はありますか？
「ありますよ」、と言って店の中から斜め方向を指差した。

25年程前に美瑛の丘を自転車で廻って汗を落とした風呂屋が建て替えられていた。建て替えたということは美瑛市の街作りに沿ったからとはいえ観光客相手に営業が成り立っているということである。

「カフェレストランおきらく亭」を2時に出る。店を出掛けに「ポトフ嫌いですが美味しかったです」
妻が、店を出たところで「ポトフが嫌いでなく、ポトフが苦手とか言うの」

「愛を積むひと」に使用された石積み塀の家を写真撮影して2時40分に離れる。

ラベンダーを妻に見せたくて「四季彩の丘」にまた行く。
「四季彩の丘」2時50分過ぎ到着。
矢張り、ラベンダーは咲いていなかった。外国人で溢れかえっていた。台の上に売り物のトマトが載せてあり、その横に写真撮影お断りのマークと言葉が添えられていた。何で？

15分ほどで「四季彩の丘」を退散する。

道の駅「スタープラザ☆芦別」に立ち寄る。午後4時着。20分ほど居る。

途中、高速無料道路の入り口を入ったところで行先を間違え、また同じインター入り口に戻る。旭川市内を走るのには厭だったから旭川と標識が出ていたので回避した。それが徒になった。

「四季彩の丘」に寄ったために小樽で寿司を食べる時間がないと、予定していた道の駅に寄ることを断念する。

小樽まで海沿いを走りたかったのだがそれも諦める。

舞鶴からフェリーで小樽に来た夜に泊まったホテルに午後7時前に着く。駐車場に車を預けて19:28小樽築港駅発、小樽19:34着の電車に乗るため急ぐ。

小樽駅からそちらの方向に向かって歩き出した。妻は大人しく付いてくる。また来るとは思っていなかったの、店の名前もうろ覚えだった。道行く人に聞こうと思っても尋ねることができない。店は寿司屋通りから外れていた。

見当をつけて路地を歩いていると昨年も来た「魚真」を探し当てた。カウンターに案内された。8時半オーダーストップだと言われる。隣の二人連れの女性客が寿司を三貫残して店を後にした。何故だろう？気になった。

21:37小樽駅発 21:43小樽築港駅着でホテルに帰り着いた。
北海道最後の夜である。

写真を見る。フォトブックの表紙を飾る一枚を500枚近い写真から探す。そう思っただけ見始めたが長距離移動の疲れが出て、満腹で、酔いも手伝い眠りに落ちた。



6月30日(金) 実際の気温 23° /15°

今夜 11 時半小樽港出発だからとゆっくりと朝食を摂る。外国人客に交じって日本人客がそれでもちらほらという。

食事のマナーが悪いと思っていたら日本人だった。

肘をついて食べる。テーブルの下で足を組んで食べる。箸を持ったまま携帯電話を使用している。食べながら飲みながらテーブルの間を歩いて席に戻る。喋りながら話し相手を箸で指す。

9 時過ぎにホテルを出る。

最後の道の駅「スペース・アップルよいち」に向かう。施設内には余市宇宙記念館がある。着いてみるとニッカウヰスキー北海道工場余市蒸溜所の隣だった。

道の駅に併設されている小さな物産店で、昨年お土産として買ったチョコレートでニッカウヰスキーを包んだウヰスキーボンボンのような製品がなくなっていた。店員に尋ねると、ウヰスキーが品薄で今年の春が最後でもう作っていないという。ないと分かるとほしくなるのが人情である。

ガイドツアーに参加する。

天使の分け前＝エンジェルシェアとはいい言葉である。

昨年と説明が少し違う。ガイドがそれぞれに工夫して伝えようとしているのだろう。ニッカウヰスキーのニッカの由来、何故ウヰスキーをウヰスキーと書くのかなど新しかった。同行者の中に的を得た質問をされる方がおられてガイドの答えに聞き入った。ガイドがその質問に的確にこたえられるのに気持ち良かった。質問も重箱の隅を楊枝でつつくような質問でなくてよかった。「研修中」のバッチを付けた新人ガイドだった。

妻が、昨年も聞いたのでしょうか？と言ったのだが、「教師によって屯田兵が等しく説明されることはない。それぞれ違う」と言ったら納得していた。

ガイドツアーの最後は試飲だった。

私の胸に「運転手です 飲めません ハンドルキーパー ニッカウヰスキー余市蒸溜所」シールが妻の手で貼られていた。

3種類のお酒が用意されていた。

竹鶴ピュアーモルトウヰスキー、スーパーニッカウヰスキー、ニッカアップルワインであった。

窓際の席が丁度空いた。

妻はそれぞれの美味しい飲み方を見ては席を立て水・氷・炭酸水をウヰスキーの入ったグラスに注いで席に持ち帰り買ったつまみを肴にして「美味しい」を連発していた。

「おつまみを食べながら試飲できるなんて、長居しちゃうじゃないの、いいんですかね、いいんです、NIKKA」と誰かの口調を真似て飲んでた。

窓の下には赤い花、コウリントンポポが群生していた。

隣は外国人の男性二人連れだった。この二人は有料の試飲バーでも飲んでた。大きな声は出さないが酔いも手伝っているのか笑みがこぼれていた。

私たちの後ろのテーブルに腰掛けていた中国人のグループは賑やかだった。

「美味しいね」を「ひよっこ」の茨木弁を真似て妻はまた言った。「お代わりできたらいいのにな」

去年はそうだったように覚えている。一種類一杯きりでなかった気がする。連れの東京の友人が「大阪のおばはんだな、流石に」と言ったのを覚えている。ウヰスキーを何度もお代わりしていた。「※蒸溜所では、見学後にウヰスキーなどの無料試飲(お一人様2杯まで)が出来ます。」であった。

ブレンデッドウヰスキー「鶴」17年・シングルモルト余市10年・アップルワインの三種類の試飲が日によってあるそうだと。ムムム・・・？だ。

私はもう少し敷地内の建物など撮影したかったのだが、すっかり気分良く酔ってしまった妻がもう充分と言ったので小樽に戻る。

小樽で妻がどうしても行きたいと言ったのは「ヴェネチア美術館」と、買い忘れたお土産を買うための「六花亭 小樽運河店」だった。

駐車をどこにするか？悩んだ。その辺りに格好の駐車場がない。夜10時まで駐車するのだ

から料金が半端でない。「タイムズ小樽堺町」駐車場は1時間800円である。フェリーターミナルの駐車場に停めた。そこから歩いた。

ダイアナ妃も乗ったという国賓用の貴重なゴンドラが展示されていた。「ガラスの水族館 きらめく 海のファンタジー」という特別企画展があった。ヴェネチア、ムラノガラスペーパーウエイト・ウェイトが欲しいと思ったが陸別の生活振りを想うと取り立てて必要と思われなかった。

夕食に寿司はもういい、と言うことで店を彷徨って探した。ところが6時でほとんどの店が閉まってしまう。そういえば寿司屋も9時で閉まる。北海道の人はせかせかと働かない。「食べていけばいいしょ」

探しあぐねて漸く、「契約農家、小樽漁港からの食材を活かし、小樽ならではのイタリア料理を提供させていただきます、『ぴあっと』」で夕食にありついた。「小樽生ワインボール」を妻が呑む。「気まぐれサラダ」を妻が食べる。「ペスカトーレ」なるものを妻が食べる。

コンビニエンスストアで北海道限定生ビール「クラシック」を買う。小樽を発つとき、二人でお酒を呑みましょうね♪である。

フェリーターミナルにメルヘン交差点から歩いて戻る。

夜11:30小樽港を定刻通り出航する。

出航するとき汽笛が昔は鳴った。それで寂しさが募ったのだが、鳴らなければ鳴らないでまた寂しい。